

[資 料]

精神障害者の自助の心理教育プログラム「当事者研究」

の構造と精神保健看護学への意義

—「浦河べてるの家」のウェブサイト「当事者研究の部屋」
の語りのテキストマイニングより—

Structure of “*Tojisha-Kenkyu* (Self Helping Study)” as a Self Psychoeducational
Program by People with Mental Illness and Its Implication to
Psychiatric and Mental Health Nursing

—A Text Mining Analysis of The “*Tojisha-Kenkyu no Heya* (Self Helping Study Room)”
Website of “Urakawa Bethel House”—

大 高 庸 平¹⁾ いとうたけひこ²⁾ 小 平 朋 江³⁾
Yohei Ohtaka Takehiko Ito Tomoe Kodaira

キーワード：統合失調症，語り（ナラティブ），エンパワーメント，回復（リカバリー），ウェブ
サイト，コミュニティ

Key words : schizophrenia, narrative, empowerment, recovery, website, community

（要 約）

統合失調症などの精神障害者にとって病気からの回復に有効な心理教育プログラムとして当事者研究がある。浦河べてるの家では、当事者の苦勞を語り仲間とともに研究して解決策を探る当事者研究を紹介するサイトを公開している。本研究の目的はこのサイトを分析することにより当事者研究の語りを分析し、その特徴を明らかにすることであった。精神障害者の語りの分析にはテキストマイニングの手法を用いた。結果として「自分」「苦勞」「人」「仲間」「病気」などの単語が多用されていた。ネットワーク分析により、当事者が自分自身を取り戻す回復のために、仲間とともに当事者研究によって考えるという特徴が明らかにされた。当事者の苦勞を仲間とともに取り戻すという回復の構造が確認された本研究の結果から、当事者同士による相互援助活動の重要性が指摘された。また、ナラティブ教材として、このサイトが精神保健看護学教育に利用できることを提案した。

¹⁾ 和光大学大学院社会文化総合研究科 Graduate School of Social and Cultural Studies, Wako University

²⁾ 和光大学心理教育学科 Department of Psychology and Education, Wako University

³⁾ 聖隷クリストファー大学看護学科 Department of Nursing, Seirei Christopher University

I 緒 言

病いは個人的な体験でありながら地域や社会の影響を強く受ける(武井, 2009)ものであるため、地域の中での当事者(患者)の主体性が大事となる。タイダルモデル(満ち引き理論: Barker & Buchanan-Barker, 2005, 2007, 2010; いとう他, 2010; 萱間, 2006)に代表されるように、当事者を主体とする回復の試みには、当事者自身の語りから構成される物語を回復への起点として考えていく必要がある。現在では当事者を再び地域につなぎ、失われた可能性や生きる力を取り戻す支援が重視されており、当事者を主体とする回復の試みへと方針は変わりつつある。

当事者主体である回復の試みの例として、病院から地域へと入院患者の地域移行を実践し、そして独特の「当事者研究」を試みている社会福祉法人「浦河べてるの家」がある。浦河べてるの家は北海道浦河町にある社会福祉法人であり、地域における精神障害者の重要な活動拠点である(向谷地, 2006, 2007, 2008; 向谷地・浦河べてるの家, 2006; 浦河べてるの家, 2002, 2005)。精神科を利用する当事者と地域の有志によって1984年に設立された浦河べてるの家は、生活共同体としての機能だけでなく、日高昆布の製造販売を柱に地域と密着した事業を展開し、働く場としての共同体として地域の繁栄に貢献している。

浦河赤十字病院では浦河べてるの家と連携して、早くから精神科病床の削減を行い、病床での治療ではなく入院患者の地域移行を実践してきた(川村・向谷地, 2008参照)。さらに当事者のニーズに応じて、当事者研究以外にも、日常生活のためのSST(Social Skills Training)、統合失調症の自助グループであるSA(Schizophrenics Anonymous)、子育て支援ミーティング、当事者同士のピア・サポート、権利擁護サービスの活用などといった支援プログラムを積極的に導入している。とくに、浦河べてるの家の理念の一つである「三度の飯よりミーティング」にあるように、お互いが語り合うことという重要性に基づいて諸活動が行われている。その一環として当事者研究がある。

浦河べてるの家において最も独特かつ特徴的なプログラムは当事者研究であろう。当事者研究とは、浦河べてるの家において30年以上にわたり当事者と支援者との実践の積み重ねの中から生まれた心理教育プロ

グラムである。

浦河べてるの家(2005)では当事者研究に共通するエッセンスを以下の5点にまとめている。すなわち、①「問題」と人との、切り離し作業、②自己病名をつける、③苦勞のパターン・プロセス・構造の解明、④自分の助け方や守り方の具体的な方法を考え、場面を作って練習する、⑤結果の検証と成果のデータベース化のプロセスを経る^{注1)}。

このような独特のプログラムである当事者研究は年々広がりを見せ、当事者研究の書籍(浦河べてるの家, 2005; 向谷地・浦河べてるの家, 2006; べてるしあわせ研究所・向谷地, 2009, 2010など)が刊行されただけでなく、当事者研究全国交流集会在2004年から毎年浦河町で開催されている。さらに浦河べてるの家では、当事者研究の成果を広めるために、ウェブサイト(以下、サイト)「当事者研究の部屋」を作成

注1) 2009年6月26日に行われた「第6回当事者研究全国交流集会」の抄録集では、当事者研究の説明がバージョンアップされて説明されている。まず当事者研究の理念を「自分自身で、ともに」としている。「自分自身の専門家としての当事者の考え方」が仲間との経験の分かち合いと専門家や家族と連携しながら行う「研究活動」によって実を結ぶことを端的に表現している。さらに、次の10点にわたり説明を加えている。(1)「自分自身で、ともに」を実践し「とらわれ」が「関心」に、「悩み」が「課題」に「孤立」が「連携」へと変化する。(2)「統合失調症週末性金欠型体調崩しタイプ」など楽しく自己病名を決め、苦勞の実感に沿って、仲間と支援者といっしょに考える。(3)「問題」と「人」とを分けて考えることにより、「問題の外在化」「人と問題の切り離し」作業を行い自分の苦勞の情報を客観的に積み上げる。(4)「主観」「反転」「非」常識をキーワードに、新しい生き方のアイデアを模索する。(5)気分はワイワイ、ガヤガヤと楽しい自由な雰囲気の研究することにより思いもよらないユニークな研究成果が得られる。(6)研究は「目に見える形」で検証し実現する。自分の苦勞を運の悪さや不幸と見なすのではなく、大切な生活情報として仲間と共有して生かしていく。(7)苦勞を「にもかかわらず笑うこと」で究極の生きる勇気である笑いを活用する。「幻覚&妄想大会」がその例。(8)過去と現在の苦勞・困難を語り説明する「言葉を変えていくこと」により経験を「意味ある人生体験」に変える。(9)「病氣も回復を求めている」。病氣や症状のシグナルは私達を回復に向かわせようとする大切な身体のメッセージである。(10)「弱さ」は力であり、当事者研究では弱い部分を持ち寄ることにより、自分の強さを発揮し、人を慰める力がある。

して、情報公開とその普及に努めている。こうした当事者研究による情報公開は浦河べてるの家のみならず、全国の当事者たちに大きな影響を与えている。

このようなミーティングや当事者研究による対話を通じての物語の取り戻しによる回復というテーマは、統合失調症への看護モデルとして創造されたタイダルモデルの主題をなす課題であり、当事者を主体とする回復の試みである。病いの回復において当事者の語りが回復への起点として位置づけられるなかで、自分自身と向き合い、仲間と物語ることを重視する浦河べてるの家では、どのような共通のキーワードがあり、どのような表現として当事者研究において語られているのだろうか。また、浦河べてるの家の回復の構造やそこから得られた体験は当事者の語りから見られるのだろうか。これらの研究的問いに対する第一歩として、本研究ではサイト「当事者研究の部屋」を分析することを通してその手がかりを得たい。

本研究では、テキストマイニングの方法を用いる^{注2)}。テキストマイニングとは、文字という質的データを統計的・量的に解析を行う手法である。数値を量的に分析する量的研究や文字という質的データを質的に分析する質的研究などと組み合わせてミックス法(Creswell, 2003)の研究ツールとしても使われる(小平ら, 2007)。

テキストマイニングの方法論的検討については、佐藤(2008, pp. 53-58)は文字テキストデータを対象とする分析方法として、質的データ分析以外に(1)質的コーディング、(2)内容分析(量的内容分析)、(3)テキストマイニング、(4)KJ法の四つを挙げ、質的データ分析との比較を行っている。このような質的研究の視点から見た場合、テキストマイニングは量的な方法に近い方法となる。また実験計画法や多変量解析が分析の多くを占める心理学研究にとっては、文字データを扱うテキストマイニングは質的研究よりの手

法と位置づけられる。

II 目 的

本研究では、当事者による語りを回復への重要なテーマと位置づけてきた浦河べてるの家の当事者研究を対象に、テキストマイニングの手法を用いて当事者の物語の記述を分析することを目的とする。

III 方 法

1. 分析対象

2008年10月2日に浦河べてるの家のサイト<http://bethel-net.jp/index.html>より、「当事者研究の部屋vol.1~18」の語りデータを取得し、テキスト化した。このとき同一人物の記述については、一つの事例としてカウントし、分析対象は全16事例である。そして、テキスト化された「当事者研究の部屋」の語りデータを、テキストマイニングソフトウェアであるText Mining Studio 3.0によって分析した。

2. 分析手順

分析手順としては、「当事者研究の部屋vol.1~18」をテキストファイル化し、Microsoft Office Excel 2003にて読み込ませ、テキストマイニング用にCSV(カンマ区切り)データを作成した。

次に、テキストマイニングによる分かち書き処理の前段階として文中の記号や特殊記号を外し、「分かち書きと係り受けと自動連結」を実行した。その際に、オプションとして「類義語自動抽出」と「見出し語が同じ場合、出現頻度の高い品詞へ統合」を選択。その後、分かち書き結果に伴い、ユーザー辞書または類義語辞書を編集し、品詞を整えたうえで再度分かち書きを実行した。

テキストマイニングを用いた分析は、次のとおりである。(1)テキスト中に出現した単語の頻度を算出する単語頻度解析、(2)テキスト全体から単語間の係り受け関係を抽出する係り受け頻度解析、(3)特定の単語を指定して、その単語に見られた係り受け関係を抽出する注目語情報分析を行った。そして、(4)単語間の共起関係や係り受け関係を抽出する、ことばネットワーク(金(2009)の言うネットワーク分析)を行った。

注2) 研究に活用できそうなテキストマイニングの文献については、林(2002)、佐良木・新田(2003)、藤井ら(2005)、大塚ら(2007)、石田(2008)、喜田(2008)、上田(2008)、金(2009)、松村・三浦(2009)などが刊行されている。また商業的な利用についても、上田ら(2005)、那須川(2006)、金井ら(2008)、池尾・井上(2008)、佐々木(2009)などの文献がある。

3. 倫理的配慮

本研究の対象は、人そのものではなく公開されているサイトの記事であり、著作権に配慮した。

IV 結 果

以上の手続きにより、「当事者研究の部屋」の16事例から得られたテキストの基本情報を表1に示した。「当事者研究の部屋」を構成するテキスト情報について、総事例数(16)の平均文字数は871.6字であり、総文数は861文で、平均文長は16.2字であった。また、「当事者研究の部屋」における内容語の述べ語数は5,075単語であり、内容語の異なり度数は1,926単語であった。それらの単語のうち各品詞別では一般名詞が最多の1,776回であり、次いで動詞(自立)が1,042回であり、名詞(サ変接続)が798回であった。

表2は単語頻度解析によって得られた「当事者研究の部屋」全体の単語頻度のうち、上位10単語を示した。「当事者研究の部屋」において最も高い頻度で出現した単語は16頻度である「自分」であり、次点に15頻度である「苦勞」「人」があらわれ、さらに「仲間」と「病氣」の出現頻度は13回であることがわかった。

表1 「当事者研究の部屋」テキスト基本情報

項目	値
総事例数(総行数)	16
各事例の平均文字数(平均行長)	871.6
総文数	861
平均文長(文字数)	16.2
内容語の述べ語数	5,075
内容語の異なり度数	1,926

表3は各事例を一つの属性としたうえで、単語頻度解析にて上位に挙げた頻出単語について属性別出現の有無を表したものである。単語頻度解析において最頻出であった「自分」については、すべての属性(事例)において文中に単語として表れ、記述されていることがわかった。また、頻出単語上位10項目すべてを用いて語っていたのはno.01, no.07, no.08, no.09, no.11, no.12の当事者研究であった。

単語頻度解析において上位に出現した単語について、注目語情報分析による係り受けを見た。「当事者研究の部屋」全体において最頻出単語であった「自分」は、係り受けとして「自分-考える」が4頻度あらわれ、次いで「今-自分」「自分-苦勞」「自分-守る」「自分-病氣」の3頻度があらわれた(図1)。また、「苦勞」を注目語とした場合には「苦勞-プロフィール」が7頻度あらわれ(図2)、さらに、「仲間」を注目語とした場合には、「仲間-相談」として4頻度あらわれ(図3)、続いて「仲間-アドバイス」「仲間-もらう」「仲間-公開」

表2 「当事者研究の部屋」単語頻度解析(上位10単語)

順位	単語	品詞	頻度
1	自分	名詞	16
2	苦勞	名詞	15
2	人	名詞	15
3	仲間	名詞	13
3	病氣	名詞	13
6	浦河	名詞	11
6	研究	名詞	11
6	自己病名	名詞	11
6	統合失調症	名詞	11
6	来る	動詞	11

表3 属性(n)別単語頻度解析「当事者研究の部屋」属性別頻出単語表

単語\属性	no.01	no.02	no.03	no.04	no.05	no.06	no.07	no.08	no.09	no.10	no.11	no.12	no.13	no.14	no.15	no.16
自分	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
苦勞	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1
人	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
仲間	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0
病氣	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0
浦河	1	1	0	1	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0	0
研究	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	1	0
自己病名	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0
統合失調症	1	0	1	0	0	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	0
来る	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0

注:表3において「属性」とは、当事者研究の主体即ち各個人を表す

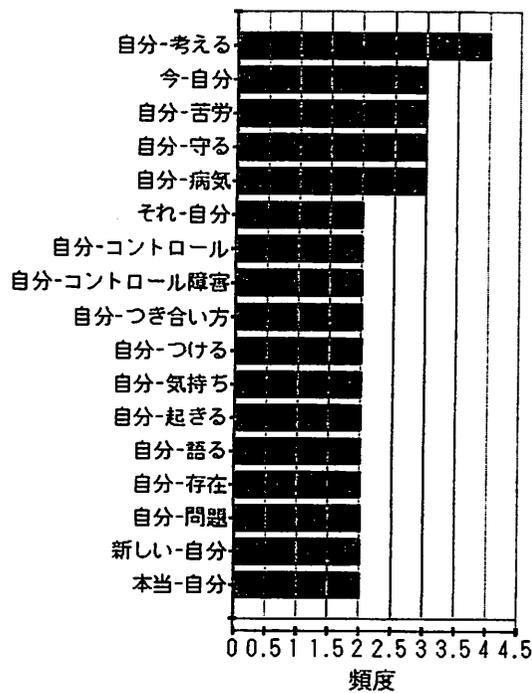


図1 注目語情報分析「自分」係り受け頻度図

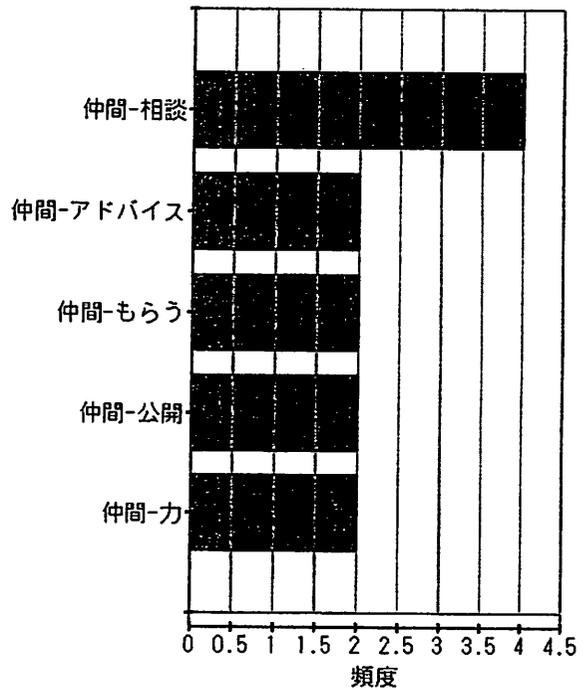


図3 注目語情報分析「仲間」係り受け頻度図

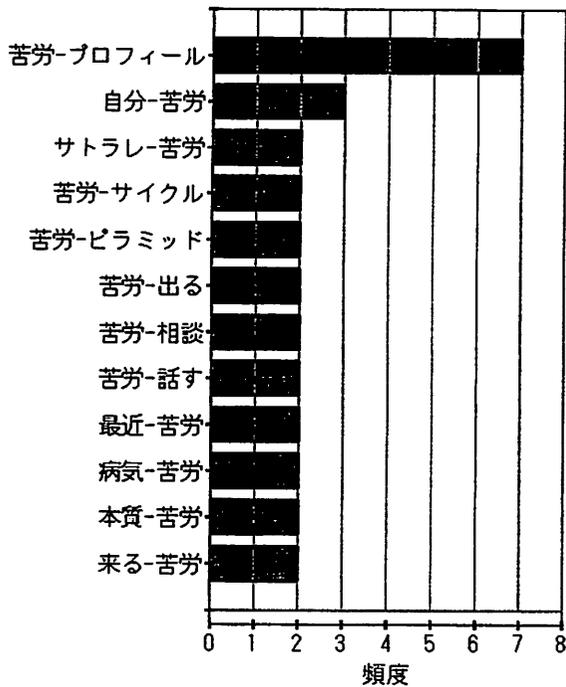


図2 注目語情報分析「苦労」係り受け頻度図

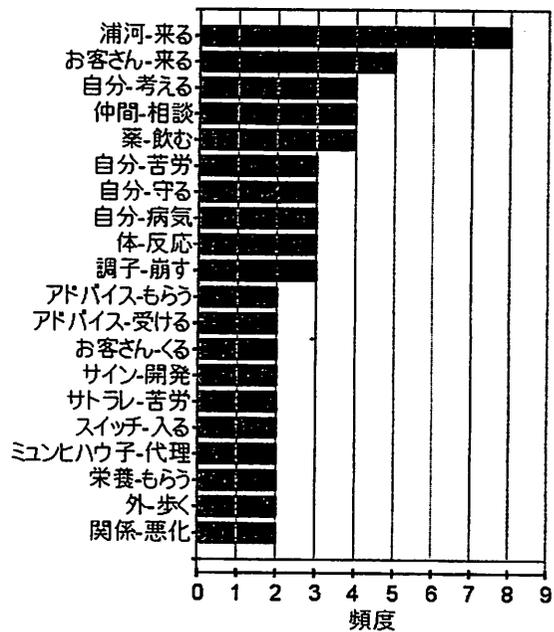


図4 全体分析：係り受け頻度解析（行動抽出）頻度図

「仲間-力」の2頻度があらわれた。

単語頻度解析において「当事者研究の部屋」すべての事例に見られた「自分」について、「自分」という単語は「当事者研究の部屋」全体の係り受けにおいてどのように用いられ、関係が結ばれているのか係り受

け頻度解析を行った。分析の設定として行動（名詞・動詞・サ変接続名詞）抽出とし、上位20件を抽出した（図4）。最も頻度の高かった係り受けは「浦河-来る」の8頻度であることがわかる。そして、最頻出単語である「自分」に関する係り受けは、「自分-考える」の4頻度と「自分-苦労」「自分-守る」の3頻度で

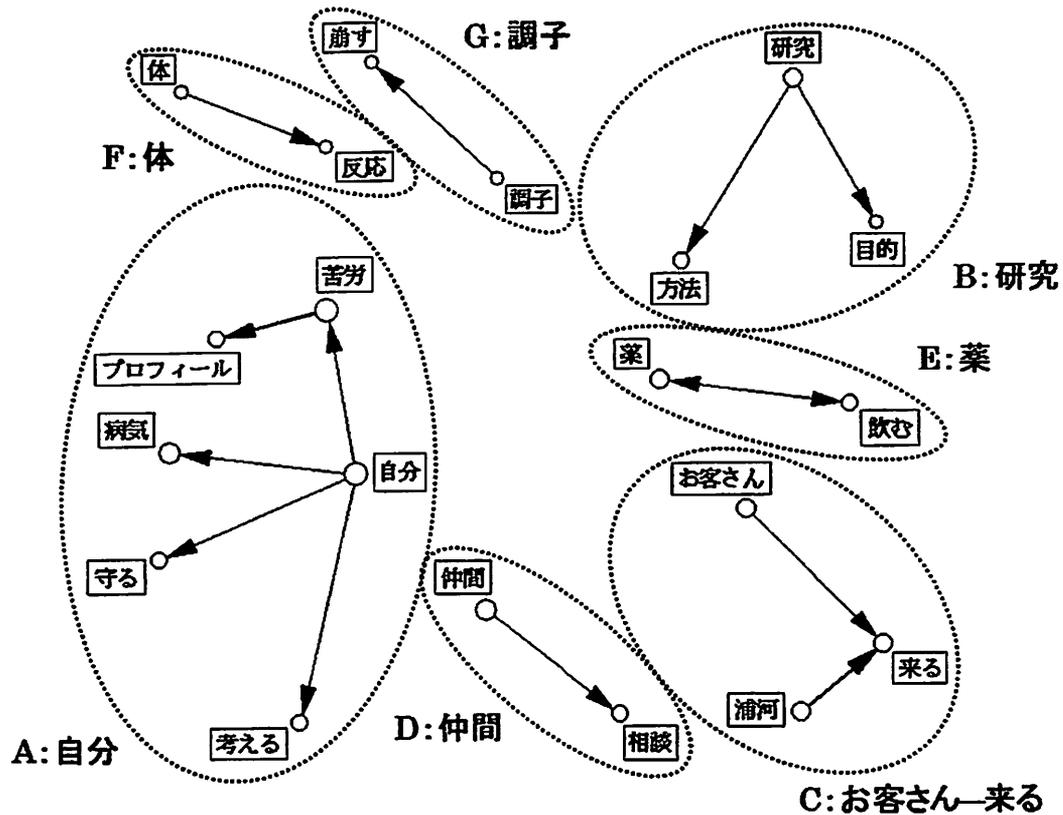


図5 全体分析：ことばネットワーク（係り受け関係）行動抽出

あった。このことから、属性別単語頻度解析において示された結果から、「当事者研究の部屋」の各事例はそれぞれ共通の単語を用いて記述されていたと考えられた。しかし、係り受け頻度解析の結果により、「当事者研究の部屋」のそれぞれの事例については、係り受け頻度における共通点が少なかったことが属性別単語頻度解析と係り受け頻度解析によって示された。

係り受け頻度解析における「当事者研究の部屋」の共通点が少なかったことを踏まえ、係り受け関係の構造について行動（名詞-動詞・サ変接続名詞）抽出を行い、頻度が2回以上であり、頻度上位10件を対象とすることばネットワークを作成した（図5）。「当事者研究の部屋」における係り受けの構造は、ことばネットワークの結果より、七つのカテゴリーから成り立っていることがわかった。図5から、AからGのカテゴリーは、「自分」「研究」「お客さん-来る」「仲間」「薬」「体」「調子」とそれぞれカテゴリー名を設定した。ここでの「お客さん」とは主に幻聴のことを表す。

同様に、「当事者研究の部屋」におけることばのつながりについて、イメージ（名詞-形容詞・形容動詞）

抽出による、2回以上の共起関係を結んだことばネットワークを作成した。その結果、最低信頼度数が80であり、クラスタ数を4とした場合に、「当事者研究の部屋」における構造は適切な数のカテゴリーに分けられた（図6）。共起関係によって結ばれたことばネットワークから図6のAからDの四つのカテゴリーが見いだされ、それぞれのカテゴリー名について「自分と人」「苦勞と仲間」「病氣」「浦河」と設定した。

V 考 察

1. 当事者研究のサイトの単語から見た特徴

当事者研究のサイトにおける16事例の語りは、単語頻度解析および属性別単語頻度解析により、それぞれの当事者が当事者研究において「自分」という共通の単語を使用していることが明らかになった。当事者研究のサイトは「自分」というキーワードを用いる、自分自身についての表現であるといえる。しかし、係り受け頻度解析の結果によって、それぞれの当事者が「自分」という単語を使用するなかで、その係り受けについては自分自身の、独自の当事者の物語を構築し

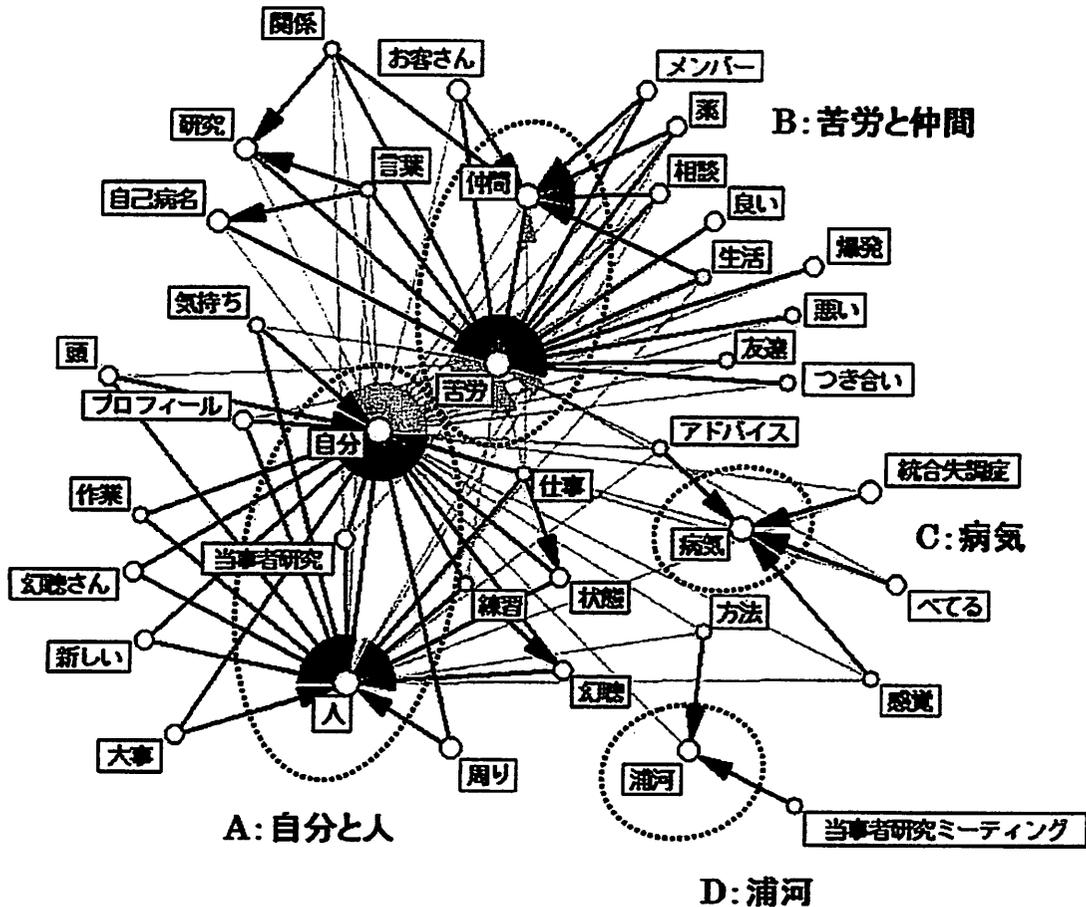


図6 全体分析：ことばネットワーク (共起関係) イメージ抽出

ていることがテキストマイニングによる分析と内容を見ることによって明らかにされた。つまり、浦河べてるの家の当事者たちによる物語は、「自分」という共通した言葉を使用しながらも、それぞれが独自の物語を取り戻すために当事者研究を行っている。

当事者研究のサイトの語りの構造は、イメージ抽出によることばネットワーク (共起関係、たとえば「自分」と「人」の結びつきや、「苦勞」と「仲間」の結びつきの強さなど) によって理念や回復への取り組みが表れ、さらには行動抽出によることばネットワークにおいて、「苦勞」の「プロフィール」や「仲間」と「相談」の結びつきをはじめとして、浦河べてるの家の理念を特徴的に表している。また、注目語情報分析「仲間」において、「仲間-相談」が4頻度と最も多く表れたことは、浦河べてるの家における仲間のあり方を示し、さらには「仲間-アドバイス」「仲間-もらう」の係り受けによって浦河べてるの家における仲間の役割を示した。さらに「考える」ことについては、現在

の自分に存在する苦勞や問題を明らかにするだけでなく、それらについて仲間と相談、またはミーティングをすることにより、自身の新たな発見や仲間からのアドバイスによって力をもらおうといった、浦河べてるの家における「仲間」のあり方が分析によって描かれていることが判明した。

2. 当事者研究の書籍とサイトの比較

本研究の結果によって明らかになった当事者研究のサイトにおける記述と、書籍における当事者研究の記述についての両者の情報量と構造の比較を行う^{注3)}。

第1に、大高ら (2010) は、向谷地・浦河べてるの家 (2006) の書籍を対象に、当事者研究の記述をテキ

注3) このような分析が可能なのは浦河べてるの家がさまざまな種類の媒体で紹介されているからである。書籍とウェブサイト以外に、たとえばTsuda & Matsubara (2010) はマンガ入の新聞 (「ばびぶべほ」) を質的に分析している。

ストマイニングの手法で分析しているのをこれを比較する。テキスト基本情報の比較では、先行研究の書籍による1事例あたりの平均文字数は2,745.3文字であり、本研究の871.6文字に対して3.14倍であった。書籍での内容語の述べ語数は9,359単語であり、本研究の5,075単語の1.8倍であった。また、書籍での内容語の異なり度数については2,987単語であり、本研究の1,926単語の1.5倍であった。本研究で明らかにしたサイトの当事者の記述は、書籍よりも内容語の述べ語数や異なり度数が少ない。総文数についてもサイトが861文であるのに対して書籍は1,093文と多く、1文あたりの文字数では書籍が22.6文字であるのに対して、サイトは16.2文字と書籍のほうが情報量は多かった。

なお、語彙の豊富さの指標として、述べ語数に対する異なり度数があり、これをタイプ・トークン比と呼ぶ(金, 2009: p. 55)。タイプ・トークン比を比較すると、書籍の場合は0.31であり、本研究のサイトの場合では0.37であった。語彙の豊富さについては、それほど両者に差がなかった。このことは1事例あたりの文章が短いサイトにおいても、書籍と同様の情報が保たれていることを示唆し、サイトは簡潔ながらも当事者研究のエッセンスが記述されている。記述内容が同等であるとすると、書籍よりサイトのほうが効楽安近短モデル(伊藤, 2008)、またはEASES Model(Ito et al., 2010)からみて、よりよいナラティブ教材(小平・伊藤, 2009; 小平・いとう, 2010)であるといえる。

第2に、大高ら(2010)は、当事者研究の事例ごとに設定された節に注目し、「はじめに」「苦勞のプロフィール」「目的」「方法」「結果」「考察」「おわりに」と項目を分けて分析している。これらの節を見ると、書籍による当事者研究の記述は科学論文と同じ体裁であることがわかり、なかでも「苦勞のプロフィール」の節については、科学論文には見られない当事者研究独自の項目である。さらに、当事者研究の書籍(向谷地・浦河べてるの家, 2006; べてるしあわせ研究所・向谷地, 2009)での記述においては、「苦勞のプロフィール」の置かれる場所が「はじめに」と「研究の目的」の間に定着していた。「苦勞のプロフィール」について、大高ら(2010)によれば、臨床心理学研究における成育歴の記述に該当するとし、当事者研究は法則定理的な自然科学的研究ではなく、個性記述的な

当事者中心の事例研究に基づきつつ、他の当事者にも共通する解決策を探ろうとする浦河べてるの家の当事者研究の仮説生成的(abductive)な性格がよく表れていると述べている。「当事者研究の部屋」のサイトでは、書籍において見られた科学論文の体裁を成している事例もあるが、事例によってはそれが見られないものもあった。「苦勞のプロフィール」については、サイトは小見出しを立てて記述されている事例と、小見出しはないのだが文中において記述されている事例があった。苦勞のプロフィールの置かれる場所は、書籍とほぼ同じであった。

第3に、テキスト周辺に着目すると、テキスト以外には書籍では挿絵があり、サイトの場合は写真が主に用いられているという特徴がある。

3. 当事者研究の意義

本研究の結果を踏まえ、精神看護学における当事者研究の意義を考察しよう。当事者の「言葉」を取り戻すうえで、浦河べてるの家の最大の特徴である当事者研究は、当事者と言葉とをつなげていく大きな役割を果たしている。浦河べてるの家において、言葉を取り戻す作業のなかで生まれる「考える」ことへの回復は、注目語の「自分」における係り受け頻度結果において示されている。浦河べてるの家における考えることへの回復は、注目語情報分析「自分」と「苦勞」による係り受け頻度結果において表れており、仲間の役割についても、「仲間-相談」「仲間-アドバイス」「仲間-もらう」の係り受けが結ばれているように、浦河べてるの家における仲間の役割が結果から示された。「言葉」を取り戻す作業は、当事者の回復のためのさまざまなつながりを生み出しており、仲間と分かち合っている。

浦河べてるの家における当事者を主体としたさまざまな取り組みには、対話を軸にした物語の取り戻しをテーマにして、さまざまな問題や苦勞を抱える当事者に対して仲間と相談し、それを力とする浦河べてるの家の独自の構造がある。行動に着目した名詞と動詞の共起関係のネットワーク分析(ことばネットワーク)によって抽出された浦河べてるの家の語りの構造は、物語の取り戻しを支援するための重要なキーワードが盛り込まれている。

浦河べてるの家の体験と理念の構造は、当事者研究のサイトにおいても、「苦勞」や「仲間」の重要性といった当事者の回復に関するキーワードがテキストマイニングによって出現した^{注4)}。この結果から、仲間と相談・ミーティングをすることによる自身の新たな発見や、仲間からのアドバイスによって力をもらおうといった仲間のあり方における浦河べてるの家の体験と理念の構造が明らかにされた。北海道の浦河べてるの家から発した当事者研究は、当初の地域における精神障害者の自助的な活動をこえて、全国的な運動になりつつある。それとともに、その「苦勞」の範囲も発達障害などの障害における問題、さらには現代社会における矛盾を持っている広範な人々において「誤作動」「爆発」にどう対処するか、また「お客さん」にどう付き合っていくかなど、一般化の過程が進行している。

精神看護学における当事者研究の意義を考えるにあたって、寶田ら(2009)によれば、べてるの家の当事者研究等の活動は、治療共同体(p.106)、社会へのリハビリテーション(p.152)、そして認知行動療法(p.158;伊藤・向谷地,2007も参照)の三つに特徴づけられる。また、精神障害者に地域で生きるための仲間の重要性(小宮ら,2009;p.231)の文脈でも当事者研究の意義が位置づけられる。

4. ナラティブおよびナラティブ教材としての当事者研究

当事者研究をナラティブとしてとらえている、いとう他(2010)は、研究のプロセスと雰囲気について、人間的暖かみHuman(e)、ユーモア性Humorous、今・ここ性(場当たり性;行き当たりばったり性)Happeningという三つのHがあり、その研究の成果(アウトカム)として討論内容が具体的Concrete、解決への姿勢が建設的Constructive、問題解決策が創造的Creative、成果の応用範囲が集団共有的Collectiveと

注4) 本研究で用いたテキストマイニングという手法は、共通して語られているキーワードや話題の頻度を量的に示すことができる。さらに、質的研究の分野についても原文参照機能によって補うことが可能である。ミックス法(Creswell,2003;井上・いとう,2010)において分析することができるテキストマイニングの手法のもつ意味は大きい(小平ら,2007)。

いう四つのCに特徴づけている。

このような当事者研究はナラティブ研究の対象として興味深く、小平・伊藤(2009)は精神障害のいわゆる闘病記(小平・伊藤,2008参照)と呼ばれる体験に根ざした「病いの語り」のメディアを、オーディオが視聴読することにより気づきや知識が得られることを重視し、「ナラティブ教材」と名づけて物語の教育的活用を提起している。Bulechek et al.(2009;p.672)の読書療法(読書セラピー)の項目においては、読書療法を「感情を表出する、積極的に問題を解決する、対処する、または洞察力を獲得することを強化するために、文学作品を治療的に利用すること」と定義し、看護介入の一つとして「患者が経験している状況または感情を反映した物語、詩、随筆、論文、自助本、または小説を選択する」行動を挙げている。前述した三つのHと四つのCの特徴を持つ当事者研究のサイトは、当事者研究の書籍と同様に読書療法の対象となる作品として、精神科看護実践にも教育にも役立てることができよう。

本研究が行った当事者研究のテキストの分析を踏まえ、今後、当事者研究のサイトが精神看護分野とりわけ精神保健看護学教育にとって、効果的で楽しく安全・安心で費用がかからず、アクセスがしやすく、短時間で読了可能なナラティブ教材として活用されることが期待される。

5. 看護学教育におけるサイトの活用

書籍や健康教育と並んでサイトの情報提供的な役割が指摘されている(Leach et al.,2007)が、それに加えて、体験に根ざした「病いの語り」がサイトで公開され、当事者や家族や一般の人がアクセスしやすくなっていることは、大変に意義のあることである。たとえば、「健康と病いの語り DIPEX-Japan」はがん患者の主体的な医療選択を支援する体制作りとして、日本における「病いの語り」のサイトでの活用を準備している(佐藤[佐久間],2008;佐藤[佐久間]・和田,2008)。また、「J-POP VOICE」のサイトでは専門家の監修を受けたうえで、がん患者と統合失調症体験者の語りを公開している(孫ら,2010)。Bulechek et al.(2009)の看護介入分類(NIC)においては、これらのサイトの看護実践への活用が期待できる。そ

これは、「望ましい認知機能の強化または促進する介入、あるいは望ましくない認知機能を変容させる介入」としての「認知療法」のなかでの「読書療法（読書セラピー）」(p. 88)を、書籍ではなくオンラインで行うという看護介入の選択肢の一つとなる可能性がある。DIPEX-Japanの「病いの語り」サイトは、医療系の教育にも活用されている (Ito et al., 2010)。二次的情報の検索としてのサイト活用としては、日本語ではon-line古書店の「パラメディカ」がある。英文では、mentalhelp.netのサイトが多数の自助本や闘病記を紹介している。

これらの情報は良質の「闘病記」として当事者や家族への情報提供の役割を果たす (健康情報棚プロジェクト, 2005) とともに、看護教育にとっても有用であろう (山口・和田, 2009)。さらに病気をめぐる偏見や誤解を克服するためのツールとしても役立てることができよう (小平・伊藤, 2007)。特に精神障害の物語である闘病記は、書き手と読み手の両方にとってのエンパワーメントにつながることを小平・伊藤 (2008) は指摘している。

6. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、全体分析において一定の結果を示すこと

ができたものの、分析対象である「当事者研究の部屋」の文章は、テキストの基本情報 (表1参照) から見てもそれほど長くはない。すなわち、「当事者研究の部屋」の基本情報による各項目の情報量が小さいことにより、それぞれの当事者に焦点を絞った分析を十分に行うことができなかった点が本研究の限界である。また、「当事者研究の部屋」は当事者本人による肉声の記録ではなく、サイト用に加工された物語であったことも限界点の一つである。しかし、本研究では、同じ問題や苦勞を抱える仲間たちが相談し合い、それを力としている浦河べてるの家のキーワードや語りの構造をテキストマイニングによって量的に示すことができた。

当事者による語りについては、本研究の分析対象であるサイトだけでなく、最近ではさまざまな病気や障害についての「闘病記」として出版されている。精神障害者本人やその家族によって書かれた闘病記については、小平・伊藤 (2008) がその意義を論じ、代表的な闘病記を紹介している。本研究を踏まえたうえで、十分な情報量を持つ闘病記をテキストマイニングによって分析することにより、当事者 (患者) を主体とする精神医療へ向けた新たな知見が導かれるだろう。

引用文献

- Barker P., Buchanan-Barker P. (2005): *The Tidal Model: A Guide for Mental Health Professionals*. New York: Routledge.
- Barker P., Buchanan-Barker P. (2007): *The Tidal Model: Mental Health, Reclamation and Recovery*. Unpublished manual.
- Barker P., Buchanan-Barker P. (2010): 英国にみる精神看護実践モデル: メンタルヘルスの回復についてのタイダルモデル. 荻岡真美, 野田文隆 (編): *精神看護学 ころ・からだ・かかわりのプラクティス*. pp. 425-433. 南江堂, 東京.
- べてるしあわせ研究所, 向谷地生良 (2009): レッツ! 当事者研究1. NPO法人コンボ, 千葉.
- べてるしあわせ研究所, 向谷地生良 (2010): レッツ! 当事者研究2. NPO法人コンボ, 千葉.
- Bulechek G. M., Butcher H. K., Dochterman J. M. (Eds.): *Nursing Interventions Classification (NIC) (5th Ed.)*. 中木高夫, 黒田裕子, 訳 (2009) *看護介入分類 (NIC)*. 南江堂, 東京.
- Creswell J. W. (2003): *Research Design: Qualitative, Quantitative, and Mixed Methods Approaches (2nd Ed.)*. Sage. 操華子, 森岡崇, 訳 (2007): *研究デザイン: 質的・量的・そしてミックス法*. 日本看護協会出版会, 東京.
- 藤井美和, 小杉考司, 李政元 (編) (2005): *福祉・心理・看護のテキストマイニング入門*. 中央法規出版, 岐阜.
- 林俊克 (2002): *Excelで学ぶテキストマイニング入門*. オーム社, 東京.
- 池尾恭一, 井上哲浩 (2008): *戦略的データマイニング アスクルの事例で学ぶ*. 日経BP社, 東京.
- 井上孝代, いたうたけひこ (2010): *ミックス法としてのPAC分析: テキストマイニングによる現状の展望, および今後の課題*. 内藤哲雄, 井上孝代, 伊藤武彦, 岸太一 (編) *PAC分析研究・実践集2*. ナカニシヤ出版, 京都 (印刷中)
- 石田基広 (2008): *Rによるテキストマイニング入門*. 森北出版, 東京.
- 伊藤絵美, 向谷地生良 (2007): *DVD+BOOK 認知行動療法, べてる式*. 医学書院, 東京.
- 伊藤武彦 (2008): *コミュニティ支援のために: 全校参加型学校支援のMEASURE法と教育モジュールの効楽安近短モデルの検*

- 討を中心に. 和光大学現代人間学部紀要, 1, 73-87.
- Ito T., Arahata T., Iba N., et al. (2010): Evaluation of the educational use of cancer narrative database from "DIPEX-Japan": An analysis of students' feedback. Poster presented at the 6th International Conference of Health Behavioral Science, Malaysia.
- いとうたけひこ, 小平朋江, 穴澤海彦, 他 (2010): タイダルモデルと浦河べてるの家: 英国と北海道から生まれた精神障害者のためのコミュニティ的人間関係援助. 和光大学現代人間学部紀要, 3, 197-207.
- Ito T., Kodaira T., Inoue T. (2010): TV Program-based preventive education for the prejudice towards schizophrenia. Unpublished Manuscript.
- いとうたけひこ, 小平朋江, 向谷地生良 (2010): ナラティブとしての当事者研究: 浦河べてるの家から. 日本質的心理学会第7回大会 発表資料 (未公開).
- 金井 進, 堀 宣男, 神田晴彦, 他 (2008): 「顧客の声」分析・活用術—テキストマイニングが拓くコールセンター高付加価値化への新たな提案. リックテレコム, 東京.
- JPOP-VOICE (ジェイポップ-ヴォイス): <http://jpop-voice.jp/> (2010年10月2日)
- 萱間真美 (2006): バーカー先生とタイダルモデル. 精神看護, 9(6), 94-97.
- 川村敏明, 向谷地生良 (監修) (2008): DVD+BOOK 退院支援, べてる式. 医学書院, 東京.
- 健康と病いの語り/DIPEX-Japan: <http://www.dipex-j.org/> (2010年10月2日)
- 健康情報棚プロジェクト (編) (2005): からだの病気の情報をさがす・届ける. 読書工房, 東京.
- 喜田昌樹 (2008): テキストマイニング入門: 経営研究での活用法. 白桃書房, 東京.
- 金 明哲 (2009): テキストデータの統計科学入門. 岩波書店, 東京.
- 小平朋江, 伊藤武彦 (2008): 精神障害の闘病記: 多様な物語りの意義. マクロ・カウンセリング研究, 7, 48-63.
- 小平朋江, 伊藤武彦 (2009): ナラティブ教材としての闘病記: 多様なメディアにおける精神障害者の語りの教育的活用. マクロ・カウンセリング研究, 8, 50-67.
- 小平朋江, いとうたけひこ (2010): ナラティブ教材としての闘病記—多様なメディアにおける精神障害者の語りの教育的活用—. 日本教育メディア学会研究会論集, 27, 37-50.
- 小平朋江, 伊藤武彦, 松上伸文, 他 (2007): テキストマイニングによるビデオ教材の分析: 精神障害者への偏見低減教育のアカウントビリティ向上をめざして. マクロ・カウンセリング研究, 6, 16-31.
- 小宮敬子, 藤井達也, 仲野 栄, 他 (2009): 地域における精神看護. 武井麻子 (著者代表): 精神看護の展開 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 精神看護学 (2). pp. 227-286. 医学書院, 東京.
- Leach L. S., Christensen H., Griffiths K. M., et al. (2007): Websites as a mode of delivering mental health information: perceptions from the Australian public. *Social Psychiatry & Psychiatric Epidemiology*, 42(2), 167-172.
- 那須川哲哉 (2006): テキストマイニングを使う技術/作る技術: 基礎技術と適用事例から導く本質と活用法. 東京電機大学出版局, 東京.
- 松村真宏, 三浦麻子 (2009): 人文・社会科学のためのテキストマイニング. 誠信書房, 東京.
- Mental Help.net: <http://www.mentalhelp.net/> (2010年10月2日)
- 向谷地生良 (2006): 「べてるの家」から吹く風. いのちのことば社, 東京.
- 向谷地生良 (2007): 精神障害者の地域生活支援と地域福祉権利擁護—北海道浦河町における権利擁護サービスの活用の現状から—. *こころの科学*, 132, 77-82.
- 向谷地生良 (2008): べてるな人びと 第1集. 一麦出版社, 北海道.
- 向谷地生良, 浦河べてるの家 (2006): 安心して絶望できる人生. 日本放送出版協会, 東京.
- 大高麻平, いとうたけひこ, 小平朋江, 他 (2010): 当事者研究の記述の構造分析: 向谷地・浦河べてるの家『安心して絶望できる人生』を対象として. 心理教育・家族教室ネットワーク第13回研究集会 (福岡大会) 抄録集, 53.
- 大塚裕子, 乾 孝司, 奥村 学 (2007): 意見分析エンジン: 計算言語学と社会学の接点. コロナ社, 東京.
- パラメディカ: <http://homepage3.nifty.com/paramedica/> (2010年10月2日)
- 佐良木昌, 新田義彦 (2003): 正規表現とテキスト・マイニング. 明石書店, 東京.
- 佐藤郁哉 (2008): 質的データ分析法: 原理・方法・実践. 新曜社, 東京.
- 佐藤 (佐久間) りか (2008): 「患者体験」を映像と音声で伝える: 「健康と病いの語り」データベース (DIPEX) の理念と実践. 情報管理, 51(5), 307-320.
- 佐藤 (佐久間) りか, 和田恵美子 (2008): 「患者の語りデータベース」を活用した医療コミュニケーションの試み. 科学技術コミュニケーション, 3, 165-176.
- 佐々木宏 (2009): 実践ブログ・リサーチ: デジタル・アカシックコードの探索. 同文館出版, 東京.

- 孫 波, いたうたけひこ, 大高麻平, 他 (2010): ウェブサイト JPOP-VOICE における統合失調症の当事者の語りの特徴. 心理教育・家族教室ネットワーク第13回研究集会 (福岡大会) 抄録集, 54.
- 寶田 穂, 江波戸和子, 森真喜子, 他 (2009): 入院治療と看護の展開. 武井麻子 (著者代表): 精神看護の展開 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 精神看護学 (2). pp. 61-170. 医学書院, 東京.
- 武井麻子 (2009): はしがき 武井麻子代表 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 精神看護学1 (第3版). pp. 1-2. 医学書院, 東京.
- Tsuda Y., Matsubara M. (2010): A study of narratives of people with mental illness: Characterizing externalized problems. Conference Program and Abstracts: 6th International Conference of Health Behavioral Science, 80.
- 上田隆穂, 戸谷圭子, 黒岩祥太, 他 (編) (2005): テキストマイニングによるマーケティング調査. 講談社, 東京.
- 上田太郎 (監修) (2008): 事例で学ぶテキストマイニング. 共立出版, 東京.
- 浦河べてるの家 (2002): べてるの家の「非」援助論. 医学書院, 東京.
- 浦河べてるの家 (2005): べてるの家の「当事者研究」. 医学書院, 東京.
- 浦河べてるの家 (2008): 当事者研究の部屋 vol. 1-18 <http://bethel-net.jp/index.html> (2008年10月2日)
- 山口知代, 和田恵美子 (2009): 闘病記朗読会: 闘病記読もう会 学生との交流を通して. 闘病記研究会シンポジウム予稿集 文部科学省科学研究費「がん対策に特化した患者図書室における闘病記を用いた患者支援の実証的研究」研究班 (主任研究者: 和田恵美子) 主催, pp. 46-51.